

# 「がん社会」は成熟国家の必然

## がん社会 を診る

中川 恵一

しかし、この「免疫監視機構」も年齢とともに力を失い、監視網から逃れるがん細胞が現れます。そして、20年といった長い年月をかけて、検査で診断できる1センチ程度に成長します。

長生きしなければ、がんになることが難しいとも言えますから、平均寿命が50歳前後だった終戦直後、がんの患者はごくわずかだったはずです。しかし、現在、男女の平均寿命はそれぞれ、82歳、88

歳と世界トップクラスです。

とくに、日本の場合、高齢化のスピードが類を見ないほど速かったのが特徴です。総人口に占める65歳以上の高齢者の割合（高齢化率）も世界最高の約3割になっていきます。この高齢化率が7%を超えると「高齢化社会」、14%

を超えると「高齢社会」と呼ばれますが、日本は「超高齢社会」です。

高齢化率が高齢化社会の7%から高齢社会の14%になるまでの年数が、高齢化のスピードの目安になります。

日本の場合、高齢化社会から高齢社会に至るまでの期間は1970年から94年までの24年間でした。しかし、フランスでは126年、スウェーデンでは85年間もかかっています。日本の24年がいかに短期間か分かります。

速かった結果、がん患者の増加も史上例を見ないスピードとなりました。この急ピッチのがんの増加に、個人の知識や心がまえ、さらには行政、教育などが追いついていないのが、今の日本の姿だと言えらるでしょう。

そして、日本の場合、欧米には存在しない特殊事情があります。移民などを積極的に受け入れず国家を維持してきたことです。

社会が成熟すれば、洋の東西を問わず、少子化と人口減は避けられず、経済成長も社会保障制度の維持も困難となります。

欧米では、若い移民が国を支える労働力として機能しています。一方、わが国では、高齢者たちも国を支える必要があり、高齢層の就労率が世界トップレベルになっています。

日本のような国家では「がん社会」は必然。次回もこの社会のあり方を考えます。

（東京大学特任教授）

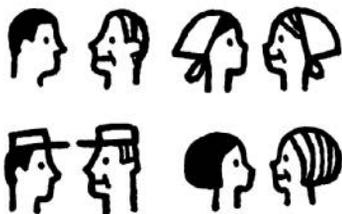


イラスト 中村 久美

明けましておめでとうございます。新年にあたり、「がん社会」についてももう一度考えてみたいと思います。

この言葉は私の造語ですが、がん患者、とくに働くがん患者であふれる社会を意味します。現実には、日本人男性の3人に2人、女性でも2人に1人が、がんを経験します。

細胞増殖に関わる遺伝子に20〜30年かけて変異が蓄積することでがん細胞は発生しますが、免疫細胞が水際でがん細胞を殺してくれています。